

社会福祉法人 大阪社会医療センター

50年のあゆみ

～ The 50 Year Footsteps of Osaka Social Medical Center ～

無料低額診療施設の経営／医療・福祉に関する相談及び支援／社会医学的調査研究

1970→2020

大阪社会医療センター50周年記念誌 の発行に際して ——50年前と現在の社会状況——

社会福祉法人大阪社会医療センター 理事長 長山 正義



あいりん総合センター内の大阪社会医療センター附属病院は令和2(2020)年で創設50周年です。50年前の昭和45(1970)年は大阪万国博覧会が開催された年で、この年を中心とする数年間は大変な時期でありました。インターン問題から医師国家試験ボイコット運動や「大学占拠」を伴う学園紛争、共産主義同盟赤軍派が起こした、日本で初めてのハイジャック事件であるよど号事件があり、昭和45年11月25日には三島由紀夫が自衛隊市ヶ谷駐屯地でクーデターを呼びかけた後に割腹自殺をしました。日本赤軍が世界各地でテロ事件を起こし、連合赤軍は浅間山荘で警察と銃撃戦を行いました。一方、この時期のあいりん地域ではドヤ街に潜伏した新左翼による扇動で暴動が頻発し、3年程で13回の暴動が起こっています。このような社会状況下で開院に至りました。

さて、大阪社会医療センター附属病院が開院して50年を経て老朽化し、耐震基準が問題になりました。大阪市議会を始め、地域住民を含めた諸会議での数年間の議論を経て、新病院は令和2年12月1日に萩之茶屋小学校跡地で開院しました。あいりん地域は行政などの対策によって当時のような悪臭はなく、ゴミはすくなくなり、小汚い感じは軽減しています。この50年間であいりん地域の人口は半分ほどになり、このままでは消滅する危機があると言われています。このため20年ほど前から釜ヶ崎のまちづくりに関する活動が行政、各種団体を含めて行われています。現在、近隣では立派なホテルが建築中であり、近々開業することです。また、あいりん総合センターの再開発の議論が始まり、あいりん地域の新しい動きが始まりました。しかし、令和元(2019)年末に中国から始まった新型コロナウイルス感染症により、翌年3月11日WHOがパンデミックを宣言しました。日本はもちろん世界中が一変しました。同年に予定されていた東京オリンピックの開催は延期になりました。世界各地でのロックダウン、不要不急の移動の制限が続くことになりました。あいりん地域でも激増していた外国人旅行者はほとんどなくなりました。令和3(2021)年になってもパンデミックは収まらず、同年7月23日にオリンピック東京2020が開催され、8月8日に閉会しましたが、新型コロナウイルス感染症は第5波となり患者は増加しています。

当院は新築する際に結核などの感染症に対応するために、旧病院には無かった4床の感染病室を設置しました。新型コロナウイルス感染症が発生したことによりさっそく役立つことになりました。また、地域施設の入所者や住民に対するワクチン接種を積極的に実施しています。この50年間には日雇労働者の減少と生活保護者の増加、ホームレスは平成12(2000)年をピークに減少し、糖尿病や高血圧、脂質異常症などの慢性疾患が増加しています。結核は医療や行政などの介入によりかなり減少しましたが、まだまだ多いです。

以上のような環境や病態の変化は、地域医療を担う当病院の今後の方向性を示唆しているものであり、これらへのさらなる対応が今後の課題であると思われます。

ご挨拶



大阪社会医療センター付属病院 前病院長 齊藤 忍

大阪社会医療センター付属病院は、初代病院長であった本田良寛先生をはじめ、大阪市、大阪府、大阪市立大学医学部関係の方々のご尽力により昭和45(1970)年7月1日に開院し、令和2(2020)年7月に50周年を迎えることができました。

当院では設立時より3つの基本的重要な事業を掲げてきました。無料低額診療施設の経営、医療・福祉に関する相談及び支援、社会医学的調査研究です。経済的理由などで受診できない人に医療を提供し、地域の状況を研究調査分析し、生活環境からも患者の総合的な把握を行うようにしてきました。私は歴代の先生方に続き平成22(2010)年より病院長を勤めさせていただきました。

設立当初、日雇労働者の多くは刹那主義的な生活を送り、自身の健康にも無頓着でした。行政の福祉政策、近隣の支援組織などによってホームレスの生活環境や街並みはかなり改善整備されてきました。

当院では社会医学的調査研究を行っていますが、それは疾患だけでなく、生活環境、栄養摂取などの調査も行い、患者の総合的な生活状況の把握に努めています。住環境では、路上生活から簡易宿泊所やシェアアパートになりました。食生活では栄養不足から質的な問題はありますが量的には満たされ、過量の飲酒も改善されてきています。疾患面では当初は感染症が多くを占めていましたが、近年では高血圧や糖尿病といった生活習慣病が多くなっています。栄養指導をはじめ専門医が指導・治療を行っています。また、この地域の特筆すべき疾患として結核があります。その罹患率は全国平均の20～30倍に達します。このため平成23(2011)年4月より結核の核酸検査(TRC法)を院内で開始しました。翌年には呼吸器専門医の常勤枠を作り、また結果が約1時間で出るLAMP法を導入しました。当院での医療を通じて患者との信頼関係が築かれ、健康に対する意識もよい方向へ変わってきています。

50周年を契機に当院も新たに大きなステップを踏み出すことになりました。あいりん総合センター内の大阪社会医療センター付属病院から新病院が少し南の萩之茶屋小学校跡地に建設されました。新病院の構想は大阪市福祉局主導で、有識者や地域代表の方々のご検討をいただき、多くの皆様のご尽力により令和2年12月1日に開院することができました。新病院では地域により貢献できるように、療養病棟、訪問看護ステーションも整備しました。

この50年に蓄積された知識と成果を糧として、関係の方々と連携し、これからも地域の皆様に愛され続ける病院として、さらなる飛躍をめざして参ります。

これまでにも増して皆様のご厚誼のほどよろしくお願い申し上げます。

お祝いのことば

大阪市長 松井 一郎



社会福祉法人大阪社会医療センターが設立50周年を迎えられましたことを心からお喜び申し上げます。

貴法人におかれましては、高度経済成長期に日本最大級の日雇労働者のまちとなったあいりん地域において、不安定な就労状況や経済状況にある方々に必要な医療と福祉を提供するため、昭和45(1970)年に設立されました。

同時に開院した付属病院は、初代院長の故本田良寛先生が実践した、生活に困窮する方々に対しても等しく必要な治療を行うという理念を今日まで受け継ぎ、生活に困っている方々を対象に、無料や低額で必要な治療を提供する無料低額診療事業を行ってこられました。

また、かつては「国民病」として恐れられた結核についても、DOTS(結核患者の服薬を医療従事者が直接管理する短期治療事業)の手法を取り入れた治療を積極的に実施するなど、未だ他の地域と比較すると罹患者数が多い状況ではありますが、地域での罹患率低減に大きく貢献してこられました。

このように設立から今日に至るまで職員一丸となって、誰もが安心して医療を受けられ日常生活を営めるよう、医療・福祉サービスの総合的な提供を行ってこられたことを通して、地域の保健と福祉の増進に大きく貢献してこられたことに深く敬意を表する次第です。

大阪市としましては、無料低額診療事業をはじめとし、地域で暮らす方々への医療の確保、福祉の向上に取り組んでまいりますので、引き続きのご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。

こうして半世紀にわたり地域の医療を支え続けた大阪社会医療センター付属病院も建物の老朽化が進み、あいりん地域まちづくり会議の議論を踏まえ、付属病院南側用地に移転建替えを行い、令和2(2020)年12月に開院を迎えられました。

新しい病院では、新型コロナウイルス感染症の感染拡大にも対応しながら、時代の流れの中で変化するニーズに的確に対応し、これまで以上に地域に開かれた拠点病院として医療・福祉の発展にさらなるご貢献をいただきますことをご期待申し上げます。

設立50周年を節目として、社会福祉法人大阪社会医療センターが今後一層発展されますよう、また、皆様方のご健勝、ご活躍をお祈り申し上げまして、お祝いのことばといたします。

これまでの50年、 そしてこれからの50年、 いつまでも地域と共に

西成区長 臣永 正廣



「シャイセン」の愛称で親しまれ、地域にとって欠かすことのできない医療機関である大阪社会医療センター附属病院が、半世紀という大きな節目を迎えられたことを心からお慶び申し上げます。それと同時に、長きにわたる地道で着実なそのご活動のご労苦と大きな成果に改めて敬意を表し、心から感謝申し上げます。

さまざまな困難に直面する西成区、特にあいりん地域においては、医療の充実、疾病予防は常に最大にして最優先の課題でした。

半世紀余り前の昭和45(1970)年、日本全国が高度経済成長に沸き、大阪は万博景気の真ただ中でした。それと時を同じくして新今宮駅前に誕生したのが、建設ラッシュを支える現場労働者雇用のための新たな施設である「あいりん総合センター」です。それは長崎の「軍艦島」のような経済成長と労働現場の象徴で、そこに併設されたのが大阪社会医療センター附属病院でした。

初代院長の本田良寛先生については、センターの公式ホームページで詳しく紹介されていますが、中学時代の喧嘩上等の圧倒的な武勇伝もさることながら、徳島出身の私にとっては徳島医学専門学校に進まれたことに勝手ながらとても親近感を覚えます。良寛先生は日雇労働者への献身的な医療従事ぶりで「昭和の赤ひげ先生」として慕われ、爾来、連綿と地域に根差した手厚い医療、健康への取り組みがなされてきました。

ただ、時代と共に内外の事情は大きく変容したうえに、あいりん総合センターは他の関連機関との複合施設で集合住宅との合築のためか、メンテナンス、改築などへの対応が不十分なことなどもあって、老朽化の一途をたどりました。

私が先に西成区長として着任した平成24(2012)年には、建設時に100年は持つと喧伝されたにもかかわらず、著しく老朽化が進んでいました。建物の外壁はすっかり退色して廊下や病棟は薄暗く、エレベーターは観覧車のようにガタガタ揺れました。正直なところ、たとえ無料であったとしてもここで診察してもらおうという気になりにくい雰囲気でした。それが今、充実したスタッフと最新の設備で見違えるまでに大変貌を遂げ、地域のみなさんも内覧会で大満足していらっしゃったようです。

この大阪社会医療センター附属病院が建つのはかつての萩之茶屋小学校跡で、5年前の平成28(2016)年に異論反論大激論の会議を重ね、住民の声を汲み上げるボトムアップ方式で新しい施設配置をはじめ、まちのかたちが生まれました。伝統を惜しみながら閉校に協力してくれた地域のみなさまのご理解に、この場をお借りして心から御礼を申し上げます。

これまでの50年を振り返るとき、その歴史を礎にこれからも末永く地域に欠かすことのできない地元に着目した医療、健康の取り組みを続けてくださいますよう祈念いたします。

お祝いのことば

前西成区長 横関 稔



時下、ますますご清祥のことと存じます。まずは、このたび、社会福祉法人大阪社会医療センター創立50周年を迎えられたことにつきまして、深くお慶び申し上げます。

大阪社会医療センター附属病院は長年にわたり、あいりん地域の医療機関として、無料低額診療事業を通じて、困窮する労働者の方に医療の提供を行うなど、地域の医療の根幹を支えられてきたところでございます。

また、西成区の福祉行政におきましても、非常に多数の方々の診療をいただくなど、その円滑な業務の実施にご尽力を賜っておりますことを、この場をお借りいたしまして厚く御礼申し上げます。

貴院の活動・功績につきましては、地域の方々からも非常に高く評価され、今後のあいりん地域のまちづくりを考えるうえにおきまして、非常に重要な要素として捉えられております。西成区といたしましても、あいりん地域まちづくり会議などを通じて、貴院の動向などに注視してきたところでございます。

そのような期待に応える形で、貴法人が開設50周年の記念の年に開業された新病院においては、従来からの無料低額診療を継続されるとともに、新たに療養病床や大規模なリハビリテーション室を備えられるなど、あいりん地域の医療機関として、高齢化の進展などの今後の地域の課題を見据えた運営をされていくものと考えます。貴法人がこのような運営を通じて、今後も、あいりん地域の医療を支え続けていかれることに、西成区も大きな期待を寄せてきたところでございます。

なお、貴院の移転をもちまして、あいりん総合センターは完全にその役割を終えたところでございます。現在、西成特区構想のもと、あいりん総合センター跡地などの利活用に向けた検討が進められております。現時点では、跡地などの南側に労働施設が建て替えられることを除いて、まだまだ絵姿は見えておりませんが、今後、あいりん地域の様子は大きく変わっていくものと考えております。

こうした中、貴院が果たしていく役割は、あいりん地域の医療機関という枠を超えて、ますます多角的かつ、大きくなっていくものとも考えておりますが、そのような役割を十分に受け止めていかれるものと確信しております。

末筆とはなりましたが、貴法人のこれからのますますのご発展を祈念いたしまして、私のお祝いのことばとさせていただきます。

創立50周年のお祝い ——半世紀にわたる貢献に敬意を表して——

大阪市立大学大学院医学研究科・医学部 医学研究科長兼医学部長 河田 則文



社会福祉法人大阪社会医療センターがこの度創立50周年を迎えられましたことを心からお祝い申し上げます。

貴法人が設立されました昭和45(1970)年といえば、日本は高度経済成長の真っ只中にあり、大阪では万博が開催されました。万博の開催に向け建設需要などが旺盛だった当時、西成区のあいりん地域には日雇労働者が溢れ、その人たちが無料もしくは低額で診療を受けられる医療施設として誕生したのが大阪社会医療センター附属病院でした。その後、日本はオイルショック、円高不況などを経験するもののバブル崩壊までは労働者にとっては需要のある時代が続きました。その中で、産業の振興を足元から支えてきた日雇労働者を医療面で常に支えてこられたのが貴法人であったと言えます。

その後の社会を取り巻く環境は大きく変化し、少子高齢化が進展し、社会保障給付が増加する一方で、経済は停滞し、わが国の社会保障制度における課題は山積しています。社会保障という面では、貴法人におかれましても、時代の変化とともに果たすべき役割が大きく変わったのではないかと思います。技術革新により労働者には力仕事に代表されるような伝統的な労働力から機械化や生産性の向上に対応できる労働力が求められるようになりました。

そもそもバブル崩壊とともにあいりん地域の労働者に対する労働需要が減りましたが、技術革新がさらに追い打ちをかけることとなりました。また、日雇労働者の高齢化も進んだことから、働きたくても働けず生活保護を受けている人が多くなり、あいりん地域の労働者が抱える問題も“仕事”の問題から“福祉”の問題へと変わってきていると聞きます。

ただ、今も昔も“医療を受けることが必要だが、受けることが困難な人のために”という貴法人の使命は変わっていないのではないのでしょうか。時代が令和に変わった今もその使命を果たし続けていられていますが、新病院開院後も益々貴院の必要性和存在感は増していくものと思われます。われわれといたしましても、人材の派遣などを通じて微力ながら貢献してまいりたいと存じます。

最後に、この創立50周年を契機として、今後も変わらず、貴法人が、労働者が自立した生活を地域社会において営むことができるよう支援するという使命を果たされ、益々発展されんことを祈念して祝辞といたします。

社会福祉法人大阪社会医療センター 50周年記念祝辞

大阪府医師会 会長 茂松 茂人



社会福祉法人大阪社会医療センターにおかれましては、このたび、めでたく創立50周年を迎えられ、さらには、新病院のご竣工、心よりお祝い申し上げます。また、これまでの輝かしい歩みを綴られた記念誌が発刊されますことをお慶び申し上げます。

今日のご隆盛の背景には、歴代院長を中心に病院関係者全員が一致結束され、数々の困難を克服されるとともに、地域に密着した医療保健活動を幅広く推進されてこられた、たゆまぬ努力の賜物と推察いたします。貴法人が運営される大阪社会医療センターは、昭和45(1970)年に設立され、日雇労働者の多いあいりん地域における唯一の公的病院として、国民皆保険制度と生活保護の狭間に置かれた労働者・野宿生活者に対して迅速な医療を提供することを目的として、今日に至るまで、地域医療のため、多大なる貢献をされ、広く社会に大きな足跡を残してこられたことに対し、心より敬意と感謝の意を表する次第です。

さて、新型コロナウイルス感染症は瞬く間に世界中に広がり、100年に1度と言われるこのウイルスとの闘いは長期戦の様相を呈してきました。我々は、今後新型コロナウイルス感染症に限らず、グローバル化した世界で発生が予想される未知なる感染症の脅威に備える必要があります。

今回のような感染拡大や過去の災害を教訓に、いざという時の病床や医療機器、人材を確保しておく必要があります。近年、国が示してきた病床削減の方針もあらためて見直すべきです。感染の爆発的増加により多数の高齢者が亡くなられたイタリアでは、緊縮財政で医療施設や医療スタッフが縮小されてきた背景があります。わが国でも長年にわたり医療費抑制政策が続けられてきました。この危機を契機に、国民の立場で、国民に理解される、国民に寄り添った医療に政策転換を図るべきであると考えます。

貴法人の皆様方におかれましても、地域住民の健康を守り続ける責務を担う医療人という立場において、より一層団結し、大阪府医師会に対しましても引き続き温かいご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

今後、大阪社会医療センターは、いよいよ次の60年、70年への第一歩を踏み出すところであります。この新しい未来に向かって、大阪社会医療センターがさらに地域に根ざし、人に安心と希望を与え、これからもあいりん地域における「よりどころ」として、お力を尽くしていただきますことを切にお願い申し上げます。

結びに、社会福祉法人大阪社会医療センターが、今後益々発展されますことと、関係者の皆様方のご健勝を心より祈念いたしまして、私のお祝いのことばとさせていただきます。

あいりん地域の医療への 貢献に感謝して

西成区医師会 会長 二木 理人



社会福祉法人大阪社会医療センターの創立50周年を心からお祝い申し上げます。

センターは昭和45(1970)年にあいりん総合センター内に設立されました。初代院長である本田良寛先生は既に昭和38(1963)年に済生会今宮診療所の所長として釜ヶ崎にいられています。赤ひげ先生または良寛先生と呼ばれ貧しい地域住民をはじめ日雇労働者たちから本当に慕われ、厳しくも深い慈愛の心を持って接していらっしゃったと聞いています。当時、日本は高度経済成長期のただなかにあり、昭和45年には大阪万博も開かれました。あいりん地域は日雇労働者であふれていました。時代はその後、バブル景気の崩壊と不況が続き労働者は仕事がなく、また高齢にもなりホームレスになる人が増え野宿者が増加しました。大阪社会医療センター附属病院はそのようななかで本田先生を継承され、特に、保険のない方や医療費が払えない方に無料低額診療を実践して地域の中心的医療機関として活動されてきました。

日本全体は少子高齢化が大きな緊急の問題とされてきています。令和7(2025)年に団塊の世代が後期高齢者となり、高齢化率は一層高くなります。そのような超高齢化社会において医療はどうあるべきかについて、病院中心の医療から地域医療完結型になるべきということが言われてきました。西成区は高齢化率が市内でも最も高く、あいりん地域はさらに高齢化率が顕著で、また、男性単身の方が多くも特徴になっています。元々、日雇労働者として働いてこられた方が高齢となり、独居の形で生活していらっしゃる方が多くいます。高齢化社会・孤立・孤独など今日、日本社会が直面している問題を先行して経験しているところです。あいりん地域は以前の労働者の街から、生活保護受給者の多い福祉の街となり、社会福祉法人の大阪社会医療センターはそのような方々の医療、保健、福祉を含めた全人的なケアを目指してこられました。

あいりん地域も含め西成区は結核患者も多い地域です。大阪社会医療センター附属病院は大阪市保健所や西成区保健福祉センターと協力して結核の医療に対しても力を注いでおられ、平成12(2000)年以降結核患者は明らかに減少してきました。

この度完成しました新病院には感染症対応病室も設置され、結核をはじめ感染症に対する病院の取り組みが期待されています。また、新たに療養病床を設けられ、訪問看護も始められるとのこと。高齢者の多いあいりん地域および西成区にとりましては非常にありがたいことです。今後も、地域の医療に、より一層のご活躍を期待します。